彼の目は、たぶんレントゲンみたいなものなのだろう、と彼女は思う。
でなければ、本人よりも先に、気がついたりできない。

「顔色が悪いな」

開口一番、そういって彼は近づいてきた。
彼女の額に手を当てながら、つぶやく。

「熱があるんじゃないか……」
「そんなことないよ」
「信用できない」

言葉とともに、体温計を渡され、はかってみると、たしかに平熱よりやや高め。
その数値をみて、彼は不機嫌そうに言った。

「自分の体調すら把握できないのか」
「どうしてわかったの」

当たり前のことを訊くなという視線。

「わからないほうがおかしい」
「微熱なのに」
「わかるさ」

ほっと息をつくと、彼は白衣のポケットに両手をつっこんだ。

「オレは医者だ。患者の体調くらい、ひと目でわかる」

彼女は不満そうに言った。

「わたしは患者じゃない」

けれども、言った瞬間、後悔した。彼が何と返すのか、明らかにわかってしまって。

「へえ」

　いたずらが成功した子供のような笑み。あるいは、悪魔の微笑みといったほうがいいかもしれない。

「では教えてくれないか。患者でもなく、なぜここにいる」

　病院の一室。彼の部屋。関係者以外、立入禁止区域。
　彼女の脳裏には、一瞬にして様々な答えが浮かんだが、どれもこれも、適切には思えなかった。
　いまここにいる理由。
　それは、とてもシンプルだが、説明するとなると、相対性理論よりもやっかいだ。

「答えたい気持ちはあるんだけど」

　彼女は視線を上げ、すぐそばにあった色素の薄い瞳を、ゆっくりと見つめた。

「熱のせいで、頭がはたらかないの、お医者様」

　だから、お薬が欲しい。
　そういうと、彼は少し不満そうに目を細めたが、仕方ないな、とつぶやいて、顔を近づけた。

「私の診察は、高くつくぞ」
「うん」
「では診察室で待ってろ」

　彼に初めて診察を受けたときのことを思い出しながら、彼女は頷いた。
　あのときは初対面だったけれど、それでもなんだかんだと文句を言いつつ、彼女を診てくれた。
　つまり、そういう人。

「そういえば……」

　彼女は出ていこうとして、ふと、つぶやいた。

「診察室って、どこだっけ」

「おい……」

　彼は絶望的な表情になった。

「場所を知らないで、どうやってたどりつくつもりだ」
「だから聞いてるじゃない」
「西棟の２階、いちばん奥だ。表札が出ているから、行けばわかる」
「西棟って、どうやって行くの？　ここは何棟？」
「……もういい」
「大丈夫だよ。なんとか行くから」
「いい。ここで診る」

　そういって彼は、彼女の手をつかむと、隣の部屋に連れて行った。